



台湾本島及び澎湖諸島の神社跡地等の調査

前田 孝和

(非文字資料研究センター 客員研究員)

金子 展也

(非文字資料研究センター 研究協力者)

坂井 久能

(外国語学部 特任教授)

I 調査概要

前田 孝和

神奈川大学非文字資料研究センターの海外神社班の3名は、台湾の神社跡地の現状確認、台湾の研究者との交流、澎湖縣の震洋格納庫・西嶼弾薬本庫の調査のため、平成29年2月18日から23日まで6日間、訪台した。参加者は金子展也、坂井久能、前田孝和。なお、3名合同での調査は20日から22日までの3日間である。

2月18日(土曜日)午後、まず坂井と前田が訪れたのは桃園神社跡地(社格・県社、桃園縣桃園市成功路200號、現・桃園忠烈祠)と淡水神社跡地(社格・無格社、新北市淡水區油車里中正路1段6巷31號、現・新北市忠烈祠)である。桃園神社跡地は流れ造りの社殿群が破壊を免れてほぼ完全な形で残存した場所で、当日は土曜日ということもあって多くの市民や観光客が訪れていた。若い女性が巫女の姿に扮して旧社殿や境内を背景に記念写真を撮影している姿には驚いた(コスプレ撮影スポットとして有名な場所だという)。

19日(日曜日)は、金瓜石社跡地(社格・社、新北市瑞芳區金瓜石金光路、一般的には黄金神社、金瓜石神社と呼称)を訪れた。神社跡地は金瓜石金鉱の歴史を展示する黄金博物館園のエリアにあり、一帯には日本家屋が残された一大観光地となっている。金瓜石社は何と云っても古代ローマのパンテオン(神殿)を彷彿させるコンクリート柱の異様さが特徴だろう。そこはバスを降りて20分程度登った山の中腹の狭い広場にある。社殿は破壊されたが、参道の鳥居2基、幟たて台、石燈籠4基、神殿の基壇及び拝殿の柱10本が残っている。明治31年(1898)3月の鎮座である。当初は流れ造りの神殿、入母屋造りの土間式拝殿(屋根はあるものの拝殿の壁は

なく開放された空間の拝殿)で、昭和12年(1937)7月に改築竣工、この時に神殿、土間式拝殿とも神明造りに変更された。訪れた日が日曜日で天候も穏やかな快晴であったことも影響しているかもしれないが、数多くの観光客やハイキングの人々が訪れていた。周囲の山々や太平洋を望む絶景の場所であり、新婚カップルの記念写真撮影がおこなわれていた。

午後は基隆神社跡地(社格・縣社、基隆市中正區壽山路中正公園、現・忠烈祠)を調査した。基隆の極楽寺、北白川記念碑、フランス墓地記念碑も訪れた。

20日(月曜日)の早朝、金子が合流し台南の保安站で下車。『我的車路坵回憶 虎山社1920～1944 私の車路坵の思い出』(発行出版・十鼓文創股份有限公司)の著者の張靜芬女史の出迎えを受け、彼女の車に同乗して車路坵製糖所の企業神社であった虎山社(社格・社、台南市仁徳郷虎山1街、現・進修館)へ向かった。現在、車路坵製糖所は仁徳糖廠と改称され、この工場の北側に位置する図書館(進修館)一帯が神社跡地である。ここでは、神社跡地を調査研究している郭吉清・高雄市舊城文化協會理事長が出迎えてくれ、同氏作成の「虎山社位置図」を見つつ神社跡地を確認したが、具体的な遺構などを見いだすことはできなかった。また戦前、日本人と台湾の人々が神社の近くとともに建てた阿弥陀堂(現在は阿弥陀仏亭)を訪れ、一對の狛犬と台座に日本人と台湾の人々の奉納者の名前と「昭和九年三月吉日」と刻印されていることを確認した。現在も現地の人々によって信仰され管理されている。この後、張女史の案内で、台南神社跡地を見学(社格・官幣中社、台南市府路前、現・忠義國民小學・芒果林公園)、社殿の敷地部分は、現在、台南市美術館当代館の建築工事が進捗していた。次に台南市の5階建てのハヤシ百貨店屋上にあった稻荷社(台南市西區忠義路2段63號、現・林百貨店)を訪れた。

いわゆる企業の神社で、コンクリートの基壇が残り、整備されている。

この後、列車で高雄市左營の左營站まで移動、そこで神社跡地の調査研究を続けている廖徳宗（皇興科技有限公司總經理）と前述の郭氏が合流、震洋部隊営内社「震洋八幡神社」跡地（高雄市左營區自助新村）と防空壕の調査を実施、地元マスコミの取材を受けた。翌日以降に神奈川大学の調査団が神社跡地の調査をおこなったことが記事として掲載された。

その後、廖、郭の両氏の案内で鳳山神社跡地（社格・郷社、高雄市鳳山區經武路42號、現・高雄市鳳山醫院）を調査、郭氏の「位置図」に記載された3対の狛犬のうち2カ所を訪ねた。大きな狛犬は、城隍廟にあり、中の大きさの狛犬は高雄市軍人忠靈祠の入り口にあった。

21日（火曜日）は、台湾南端に位置する屏東縣のクスクス祠跡地（社格・祠、屏東縣牡丹郡高士）調査と牡丹社事件関連箇所の見学である。朝、バスで恒春に向かい、車中より佳冬神社（社格・無格社、屏東縣佳冬郡佳和路、現・基壇残存）を確認する。恒春着後、牡丹社事件以降、清時代に築城された古城の城門と城壁を見学、恒春神社跡地（社格・無格社、屏東縣鎮綱紗里、現・水道局施設）の入り口まで行くが階下の門が施錠されているため中に入ることができなかつた。だが参道階段上がった所に貯水タンクを確認、そこに社殿があったものと推測される。狛犬は近くの天后宮の入り口に安置されているのを確認した。そして車で40分余り、牡丹郡高士村高士仏に^{くすくす}着いた。車だからこそ短時間で高士村に着くことが可能だが、戦前だと秘境に近い別天地であったのかもしれない。山々の中腹に位置する高士村は長屋式の文化住宅や一戸建ての住宅が点在しており、神社跡地は山頂が開墾された場所にあり、四方の山並みを見渡し、遠く東側には太平洋を望むことができる美しい場所である。基壇は残っており、今から2年前の平成27年8月11日、新たに高士神社として招魂・遷座祭^{くすくす}が、翌12日に鎮座祭が斎行され、それ以降、現地地の協力を得て、定期的に日本から神職が出向き神事が執りおこなわれ、祭神は高士佛戦没之靈神という。戦前のクスクス祠の祭神は天照大神といわれており、クスクス祠の再興とは違うようだ。小さな神殿は、旧基壇の上に設置されており、鳥居も建てられるなど神社の様相を呈している。高士神社の鎮座に対して台湾では種々の見解が出されているようであるが、信仰の自由を認められている台湾で戦前の神社に対する神社への評価と混同して一方的

な判断が許される筈はなく、文化の多元性を標榜する台湾の許容性をどれだけ見せることができるのか興味深い。広く台湾に認知されるには祭祀の継続と交流が必要であり、そのためには今少し時間が必要なのかもしれない。

その後、高士村の祖霊屋、高士村の町並み、高士村のキリスト教会を見学、そして海岸線に降り再び山道に入り牡丹社事件の石門古戦場資料館、西郷都督遺蹟記念碑、征番役戦死病没忠魂碑、琉球藩民三十四各墓、日本軍の討番軍本營地記念碑、日本軍上陸地を見学。そして高雄への帰途、佳冬神社跡地に寄り、基壇、鳥居、燈籠、神橋、玉垣などを確認した。

22日（水曜日）は早朝、高雄空港から澎湖縣の馬公空港に向かい、澎湖縣文化局の曾慧香局長を表敬訪問、震洋格納庫・西嶼彈藥本庫の見学・調査、澎湖神社（社格・縣社、澎湖縣馬公市新生路、現・澎湖縣立馬公中学の運動場及び校舎）、澎湖遙拝所（澎湖縣馬公市長安里正義街1號・現・澎湖天后宮裏、また道路を挟んだ反対側の歴史建物に指定された憲兵隊施設の跡地）と想定される跡地調査、日本軍の上陸記念碑の見学をおこなった。神社遺稿として現時点で唯一残されているものが、澎湖縣文化局（黄長銘、洪進業の両氏）の案内で初めて確認できた燈籠の竿の一部である。それは港に近い阿東海鮮餐廳（海鮮レストラン）の入り口におかれていた。その竿の一部には表に「奉納」、裏に「昭和十九年」と刻まれている。夕刻、空路にて台北に戻った。

最終日の23日（木曜日）は再び2人（坂井、前田）での調査となり、台湾神宮跡地（社格・官幣大社、台北市中山區中山北路4段1號、現・圓山飯店及び会員制のスポーツセンターの圓山聯誼会）と建功神社（社格・無格社、台北市中山區南海路41號、現・国立教育資料館）の調査をおこなった。いずれも神社跡地としては良く知られている。幸運にも台湾神宮の新社殿跡地の御霊代避難場所である、いわゆる「地下神殿」（専門的に「御宝庫」という）の場所を確認した（「地下神殿」は未確認）。午後、帰国した。

今回の調査で、特に有意義であったのは、現地地の研究者との交流がいかに大事であるかをあらためて確認したことである。彼らの調査はかなり進んでおり、新情報も得ることができ、さらに情報交換の必要性も確認したことである。神社遺稿の新発見では、澎湖神社の燈籠の竿1基を確認できたことである。



II 海軍水上特攻隊 震洋隊 震洋八幡神社

金子 展也

鄭時代～清朝時代の台湾

鄭成功がオランダ人を台湾から追放し、1661年、首都を承天府（現在の台南市内に残る赤崁楼^{せきかんろう}）とし、北に天興県、南に萬年県（現在の高雄市左營地区）を置き、同時に、前、後、左、右、中の5つの「衝鎮（軍隊の駐屯所）」を置く。「左」の衝鎮は左營^{ゾウイン}と呼ばれた。その鄭成功は台湾を「反清復明（清に抵抗し明の復興を企てる）」の拠点とするが、間もなく病没する。その後、清朝の攻撃を受けて、鄭氏政権は崩壊する。1683年だった。翌年、清朝は台湾府を福建省に設置、その下部に諸羅県、台湾県、鳳山県を設置する。台湾県、鳳山県が鄭時代の旧萬年県の管轄地区に相当した。

1787年、旧城が林爽文事件によって破壊されたため、埤頭街（現在の高雄県鳳山市）に鳳山県新城が新たに建築され、同時に県都が移転する。そして、この新しい県都を「新城」、それまでの左營旧県都を「旧城」と呼ぶようになった。

震洋特攻隊とは

太平洋戦争末期、沖縄失陥後、米軍に対抗するうえで戦力となる航空機や戦艦はもはや十分ではなく、日本帝国海軍は限られた物資の中、起死回生の特攻兵器の開発に着手する。その中の1つが「〇四金物（まるよんかなもの）」という秘匿名称を持つ新兵器であった。この「〇四金物」とは、自動車エンジンを使用したベニア板製の滑走艇とし、ガソリンまたはエタノール・アルコールとガソリンとの混合を燃料とし、艇首部に爆薬を装設、敵艦艇に衝突するようにしたものである。後に「震洋」と呼称され、「震洋」とは、太平「洋」を「震」撼させる、という意味があった。

台湾の震洋隊

台湾には淡水（第102及び第105震洋隊）、基隆（第25震洋隊）、高雄（第20、第21、第29及び第31震洋隊）、海口（第28及び第30震洋隊）、そして馬公（第24震洋隊）の10震洋隊が存在した。高雄左營には4部隊あり、その内、3部隊は左營埤子頭^{きせいひしとう}（清朝鳳山県旧城内）にあった。1944年11月～12月に佐世保を出港し、11月末～翌年1月初めにかけて左營港に到着する。

それぞれの隊は183～191人で構成され、53～55艇の震洋艇を保有した。

左營港に到着した震洋隊は清朝時代に築かれた左營旧城の城壁に沿って舎営所を築く。震洋艇が配置された格納壕のある海岸までは約2.5kmの地点であった。その舎営所は現在の「左營区西自助新村」であり、西自助新村とは、1949年に国共内戦で敗れた国民党軍人やその家族で、外省人と呼ばれる人々が移り住んだ居住地の1つであり、一般に眷村と呼ばれている。

2013年3月、政府の土地区割り整理に伴い、西自助新村に居住する外省人の立ち退きが終わり、この左營旧城に於ける清朝時代の歴史遺跡の調査が行われ、遺跡の掘り起こしが始まる。その過程で防空壕跡が至る所に発見され、この地域一帯が旧日本海軍震洋隊の舎営基地であったことが判明する。防空壕跡の場所には一定の法則があった。「必ずマンゴーまたはロンガン（龍眼）樹の下」である。

他に例のない瓢箪^{ひょうたん}に似たドーム型の防空壕が17か所見つかっている。壕内の高さは約2.1mあり、壁の厚さは65cm、両側に入り口がある。25人程度が入れる。そして、旧城城壁に沿って、士官舎、兵舎、炊事所、倉庫、便所、車庫、燃料庫や充電所が並んだ。

高雄からの問い合わせ

2014年2月に入り、高雄でIT関係の会社を経営する傍ら左營旧城の歴史研究を行っている廖徳宗さん及び郭吉清さん（高雄市旧城文化協会顧問）から連絡が入る。「左營旧城内に日本海軍第20震洋隊^{すずき}（薄部隊）の基地に神社遺跡（基壇）があり、震洋隊が左營に建立したのではないかと。また、その神社遺跡傍に手水鉢が土の中に埋まっている」との内容であった。早速、坂井久能特任教授に連絡を取る。坂井さんは宮内神社（軍隊の施設内に建立された神社）を研究しており、その道の専門家である。台湾と日本からの情報交換により、次々と台湾から質問が寄せられた。

①旧城から発見された基壇、手水鉢及び参道の石段は神社のものか？②海外に海軍が造営した神社があるか？写真はあるか？③仮に、震洋隊が造営した神社であるなら、その祭神は？④『回想 薄 部隊：海軍第二十震洋特攻撃隊』が奈良県立図書館にあり、この中に神社の記述があるか？

震洋神社の確証

回想録の口絵に、「震洋神社とその製作者」とのタイトルが付いた小さな祠の前で写された隊員があった。また、回想録には、戦後の部隊処理の記述で、「先ず震洋神社



写真1 震洋八幡神社(『回想簿部隊』)

を焼く(兵舎後の城壁の上に安置してあった)」とある。この記述より、間違いなく口絵の写真は「震洋神社」であり、現存する基壇、手水鉢や石段は「震洋神社」のものであることが証明された。

更に、薄部隊長のご息と連絡を取ることができ、平成5年(1993)発行の『薄会(第20震洋特別攻撃隊戦友だより』の記事によると、この神社の正式名は震洋八幡神社であり、ご祭神は佐世保市の亀山八幡宮の分霊であることが判明する。また、この小冊子に神社奉焼時の写真と本殿前の鳥居も掲載されていた。

震洋神社調査

2017年2月、改めて震洋部隊舎営基地及び神社跡地



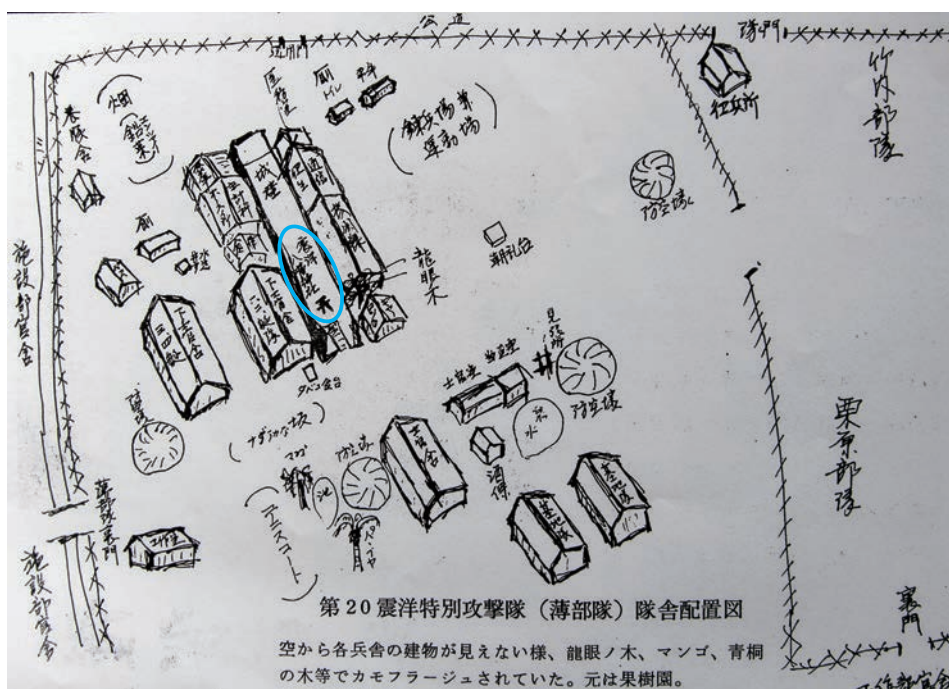
写真2 城壁上の基壇



写真3 城壁の一部。写真左側に石段がある

の調査を行う。神社位置は写真4に示す通り、城壁の上であり、写真3の通り、石段を登ったすぐのところであった。実測から基壇底辺が120×130cm、基壇上部80×94cm、高さ68cmと判明する。石段を登ってすぐに鳥居があり、左側に手水鉢が配置されていたと考えられる。第20震洋隊がこの地に入ったのが1945年1月であるため、神社造営は同年前半頃と想定される。

終戦と共に神社本殿は奉焼される。奉焼にあたり、本殿は基壇から分離され、近くの山すそに運ばれて奉焼されたのではないかと、坂井特任教授は分析している。城壁の上では火の粉が飛び散り、危険であるためである。更に社殿の周りに注連縄が張りめぐらされ、紙垂が付けられているので、焼く前に神道儀式として「奉焼式」が行われたことが判明する。



第20震洋特別攻撃隊(薄部隊)隊舎配置図

空から各兵舎の建物が見えない様、龍眼ノ木、マンゴ、青桐の木等でカモフラージュされていた。元は果樹園。

写真4 第20震洋隊舎配置図(『薄部隊 戦友だより』)



III 澎湖西嶼の震洋格納庫跡と西嶼弾薬本庫跡

坂井 久能

はじめに

澎湖諸島西嶼の澎湖県定古蹟「東鼻頭震洋格納庫」と同古蹟「西嶼弾薬本庫」は、現在陸軍の基地内にあることから、非文字資料研究センター長から澎湖県政府文化局宛に見学を申請し、文化局が軍と交渉してくれた。台湾師範大学の蔡錦堂教授や高雄市の研究者廖徳宗氏のご助力も得て、金子展也氏が窓口となり交渉に尽力した。見学許可を得た我々は、2017年2月22日に文化局の曾慧香局長を表敬訪問し、局員黄長銘・洪進業両氏の案内で東鼻頭の軍施設に入り、軍の出迎えを受けて震洋格納庫・西嶼弾薬本庫を見学した。日本からの調査受け入れは初めてという。ご支援をいただいた多くの方々に深く感謝申し上げます。

1 東鼻頭の震洋格納庫

日清戦争の結果日本領となった澎湖諸島の軍事上の重要性から、陸軍は澎湖島要塞を築造し、海軍は馬公要港部を設置した。太平洋戦争直前の1941年に馬公要港部は警備府に昇格したが、43年に警備府を高雄に移し、馬公には特別根拠地隊が置かれた。

馬公のある澎湖本島を東に望む西嶼（漁翁島）の東南端、東鼻頭の海に面した南側丘陵腹部に震洋格納庫跡がある。震洋は、250キロ爆弾を搭載したモーターボートの特攻兵器で、1944年8月28日に制式採用された。台湾には震洋隊が10部隊配置され、うち澎湖諸島は、同年11月5日に編制された第24・第25震洋隊であった。両隊は翌年1月に佐世保を出港し、2月に馬公特別根拠地隊に属して前者は西嶼の南の望安（八罩島）、後者は西嶼の東鼻頭を基地とした。両隊とも搭乗員50名、基地隊員等を含めて180余名の兵員で構成され、震洋艇は1型（1人乗り）50隻であった。

東鼻頭の震洋基地には図1のような施設があり、栈橋から右手（西）は陸軍用地であった⁽¹⁾。次節で述べる弾薬本庫跡がある場所である。震洋格納庫は、第25震洋隊が建設を進めたが、同隊が基隆転営に向けて6月中旬に馬公を出港すると、望安の第24震洋隊が東鼻頭も受け持つことになり、未完の格納庫の建設を継続した。

東鼻頭の震洋格納庫は、図2のように奥が連結している第1～3壕と、その東の第4壕が確認されている。

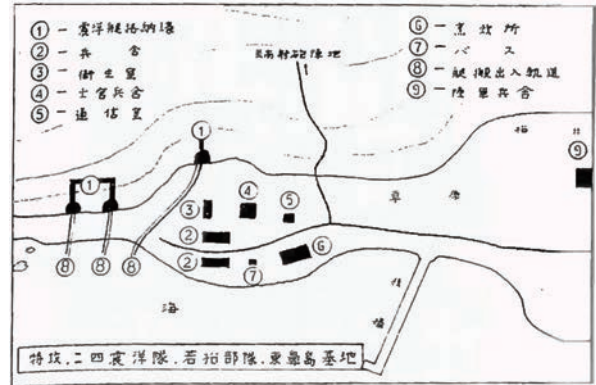


図1 東鼻頭の震洋基地（海側が北。注1文献付図）

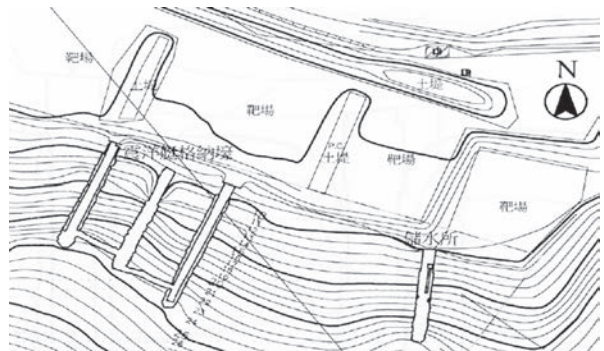


図2 震洋格納庫跡及び周辺の実測図（注2文献付図）



図3 第3震洋格納庫内部

壕の構造は近似し、ともに入り口部分は半円形にコンクリートを巻き、その奥は岩盤（玄武岩か）の掘削跡がむき出しになっている。断面は第1～3壕が方形(図3)、第4壕は半円形である。規模は、第1～3壕の幅は3.4m、高さは2.23、2.5、3.06m、長さは31.9、31.0、37.4m。第4壕は幅3.0、高さ3.1、長さ26.6mである⁽²⁾。

震洋格納庫は、1944年8月の海軍施設本部作成「震洋基地構築要領」⁽³⁾によると、壕の幅3.0、高さ2.5、長さ27.0mと定められ、4隻格納の長さである。東鼻頭の格納庫は概ねこの規準に合致しているといえよう。但し、最長の第3壕に5隻入れても17隻分しか格納できない。第24震洋隊は艇50隻の格納を望安も含めて調

整したのかもしれない。なお、第4壕は湧水により使用できなかった可能性はあるが、塩分の多い井水のなかで雨水濾過の湧水は貴重であったと思われる。

震洋艇の搬出入として、図1に「⑧艇搬出入軌道」とあるので、格納庫から海岸までは艇をトロで運搬する軌道が設けられたようであるが、図2のように土堤や射撃場などで改変されており、確認できなかった。

2 西嶼弾薬本庫

陸軍築城部は、1900年に澎湖島要塞の建設にかかり、1903年には馬公に要塞司令部が置かれた。西嶼に築かれた^{ほうらい}堡壘・砲台への弾薬供給や火薬等の保管を行った施設が西嶼弾薬本庫である。前記震洋基地跡の西側の深く入り込んだ谷奥に清涼火薬庫1棟、その手前左手に洞窟式火薬庫が3本残存している(図4)。

清涼火薬庫は、三方を山に囲まれ火薬庫の周りに高い石垣をめぐらし、敷地入り口には門柱と歩哨舎^{ほしやう}などがある。火薬庫は石造の外壁に木造の内部という二重構造で、中央入り口を入ると両側の格納室は床を1.2m程高くして通気性を考慮している。注(2)報告書で本火薬庫を1930年改築の「土窟式清涼弾薬庫」とするが、同庫は1936年度に「更に洞窟式に改造」している⁽⁴⁾、誤りであろう。名称も「清涼火薬庫」が適切である。

洞窟式火薬庫3本のうち2本は通路奥で連結し、連絡通路の長さは23m(両外庫間)である。各庫の基本構造は近似しており、通路奥に分厚い鉄筋コンクリートをドーム状に巻いた外庫と、その内に70cm程の隙間を設けて厚さ30cmの鉄筋コンクリート造りの内庫がある。内庫は前室を設けて2箇所の鉄扉で密閉している。格納部は、幅5m・奥行き28m(単窟は30m)で、側壁から天井まで全て銅板を張り(図6)、1枚約178×88cmの銅板を重ねた部分ははんだ付けして銅鋸を打ちこんでいる。銅板張りについて、1935年10月7日付澎湖島要塞司令官から陸軍大臣宛の申請文に「昨年来之^{これ}が内部銅板張防湿作業実施せられ、今回気密試験の結果良好」であったので、アドソール乾燥装置を備えたいとある⁽⁵⁾。内部銅板張りは防湿効果を目的として、1934～35年に実施したことがわかる。外庫・内庫と前室を設け銅板を張り、さらにアドソールを使用することで、湿度と温度を適度に保つことができたのである⁽⁶⁾。

おわりに

震洋格納庫の保存状態は良好である。戦後の改変や



図4 西嶼弾薬本庫跡及び周辺の実測図(注2文献付図)



図5 清涼火薬庫



図6 洞窟式火薬庫の内庫内部

海に向かう斜路の調査が今後望まれる。

弾薬本庫も保存状態がよく、洞窟式火薬庫の銅板の輝きは目を見はるものがある。清涼火薬庫前の建物や歩哨舎奥の建物、兵舎などの精査が今後望まれる。澎湖県政府は、2010年に両遺跡を古蹟に指定して、保存と公開に向けた整備を進めている。今後の取り組みを期待したい。

〔注〕

- (1) 波佐義明『冬の残紅』1989年、414頁
- (2) 楊仁江建築師事務所『澎湖縣縣定古蹟西嶼彈薬本庫及東鼻頭震洋艇格納壕調査研究』2012年、澎湖県政府文化局発行
- (3) 海軍施設本部『魚雷射堡甲標的揚卸施設並ニ震洋基地構築要領』1944年、防衛省防衛研究所所蔵
- (4) 陸軍築城本部『現代本邦築城史』所載「澎湖島要塞築城史」1943年、国立国会図書館所蔵
- (5) 陸軍省大日記乙輯、防衛省防衛研究所所蔵。C01002072400
- (6) 遺跡の概要は注(2)文献を参照した。また要塞研究者の白井敦氏から多くの資料や情報を得た。付して感謝申し上げます。